

後置主題文の機能分析

進藤三雄

1 はじめに

我々は突然誰かに話しかけられたり途中から会話に加わったときなど、何について話されているかわからず困ることがある。これはその場のスキーマが聞き手に不足しているために引き起こされるものである。Brown & Yule (1983)によれば、スキーマとは談話理解における期待や予測をもたらす組織的な背景的知識としており、それが談話内に設定されて初めて、我々は談話内で話されている内容を正しく理解することができるのである。

言語活動の中でスキーマを形成するための中心的役割を果たすのは主題である。会話の相手が知らないものについて説明を加えても、相手は何のことが説明されているか判らないわけであるから、主題として取り立てられる対象は会話の相手が何を指しているか見極められるものでなければならない。そしてそのような情報（主題）は発話の前半に述べられ、それについて述べられた情報（題述）は後半に述べられるのが効率的であると一般的に言われている。

しかし、このことは主に書きことばに通用する規則で、我々は日常会話の中で主題を題述の後に置き、同時にそれを自然な表現方法として理解することを普通に行っている。その場合、情報を送る側は、情報を受け取る側がその意図を正確に理解できるだろうという前提の上にあえてこのような倒置表現を使用しているわけで、そこには何らかの情報伝達上重要な機能が隠されていると思われる。

本稿では、倒置の中でも特に主題が文末に後置された後置主題文に焦点を当

て、その語用論的情報伝達機能と形態的特性の分析を試みる。そして、主題後置が特に話し言葉において対人コミュニケーションを円滑に行う上での有効かつ積極的な談話ストラテジーであることを提示する。分析にあたっては、主に日本語小説における会話文を取り上げ、数量的分析も含めながら行う。

2 英語の主題と後置文

2.1 英語の Theme と Rheme

英語では主題は Theme として取り扱われるが、この Theme はもとはプラハ学派のマテジウス (Mathesius) などの言語学者グループによって作られた概念である。彼らはメッセージの構造を Theme と Rheme の二つに分けた。プラハ学派の考えを引き継ぎ体系化したのが Halliday で、彼は、Theme と Rheme について次のように述べている。

The Theme is the element which serves as the point of departure of the message, the part in which the Theme is developed, is called the Rheme. As a message structure, a clause consists of a Theme accompanied by a Rheme; and the structure is expressed by the order – whatever is chosen as the Theme is put first.

(Halliday 1994: 37)

また、Halliday は次のようにも述べている。

As a general guide, the Theme can be identified as that element which comes in first position in the clause. (ibid: 38)

つまり、節は主題と題述とから構成され、主題 (Theme) とはその節が語ろうとするメッセージの起点としての役割をはたす要素で、題述 (Rheme) とはその主題を展開するものである。そして主題は題述に先行し、常に文頭に現れると規定している。このような考え方に立ち、Halliday は次のような具体例を挙げて Theme/Rheme 構造を説明している。

- (1) Mary had a little lamb.
 (2) Can you keep a secret?
 (3) Who killed Cock Robin?
 (4) Answer all five questions! (下線部は主題を表す)

(1)は名詞が主題になっている場合で、特に問題はない。しかし、文頭の要素をすべて主題と規定したため、(2)~(4)のような名詞以外の語も主題と認めている。Halliday (1994: 47-52) の説明によると、(2)の yes-no question における主題の意味は、‘I want you to tell me whether or not’ で、(3)の WH-question は、‘I want you to tell me the person, time, thing, manner, etc.’、また(4)の命令形に関しては、‘I want you to do something’ という意味を伝えているという。しかし、日本語や他の言語との比較から、このような主題の認定方法には無理があると多くの指摘がなされている。例えば、瀬戸 (1983: 106) は、(3)の “who” は日本語では「だれが」と「は」をとらないため、主題として取り扱うことに疑問を呈している。

また Halliday (1994: 53) は、主題は多重構造を成すと考え、主題構成要素の典型的な順序は「テキスト形成的[^]対人的[^]経験構成的」の順であるとしている。ただし、経験構成的要素に関しての主題は最初に現れたもの1つだけで、それ以外の要素は Rheme の一部として考えた。そのため、強調や否定構文などにおいて本来の Rheme の一部であった要素が主語の前に置かれた場合、それを有標の主題として捉え、後置された主語は Rheme の一部として考えた。たとえば、叙述節における典型的な有標の主題とは、(5)のような名詞類としての補部が文頭に置かれたものや、(6)のように前置詞句などの副詞句が文頭に現れ主題化されているものである。

(5)

Talent,	Mr Micawber has;	capital,	Mr Micawber has not...
Theme	Rheme	Theme	Rheme

(6)

Until the arrival of that remittance	I am cut off from my home...
Theme	Rheme

(Halliday 1994: 48)

このような Halliday の考え方からだと、主題は文中や文末には生起しないことになる。これに対して、有標の主題の後に別の主題を認めてもいいのではないかとの主張もある。

(7) In 1960, were you still a small boy?

例えば(7)は Halliday によれば 'In 1960' だけが主題ということになるが、河野 (1992: 68) は、一般に、時間の主題は事件の外枠を大ざっぱに示すだけであるから、事件の直接の参加者 (すなわち命題の項) の一つをさらに主題に選んで主題を多重化することには何ら問題はないと考え、経験構成的要素の中にも複数の主題の存在を認めるべきだと主張している。

また龍城 (2000: 224) は、Halliday の英語におけるテーマの解釈では、文頭に Rheme が具現しないという点が問題であると指摘し、文頭に具現した特別な要素を Marked theme という概念で捉えるのではなく、その Marked な要素をそのまま Rheme として残し、Rheme-Theme という有標構造を設けるべきであると提案している。このように、Halliday は確かに、主格以外のテーマという要素が文構成に重要な役目を果たすことを指摘したが、テキストにおける情報の新旧や話し手の視点などの観点を主題構造の中に取り組んではない。

以上ことから、Halliday の主題は日本語の「は」による主題とはだいぶ性格の異なったものであり、主題そのものに対する考え方も違うと言わざるを得ない。その意味で、経験構成的要素に複数の主題を認める考え方や、Rheme-Theme といった主題構造の可能性を視野に入れたより普遍性の高い主題構造の枠組みを検討することが必要であろう。

2.2 英語の後置文

高見 (1998) は、英語においてもっとも重要な情報は後置されるが、そうでない情報は後置されないことを(8)、(9)の例文を使って示した。(8B1)、(8B2)、(9B1)は最も重要な情報が文末に来ているので適格であるが、(9B2)は、his wifeより重要度の低いthe beautiful white sweaterが文末に移されているために不適格になる。

(8) A: What did John buy for his wife?

B1: He bought a beautiful white sweater for her. (基本語順)

B2: He bought for her a beautiful white sweater. (後置文)

(9) A: Who did John buy a beautiful white sweater for?

B1: He bought the beautiful white sweater for his wife. (基本語順)

B2: *He bought for his wife the beautiful white sweater. (後置文)

(高見 1998: 143)

また、(10)では、後置文における定表現(旧情報)と不定表現(新情報)の適格性を比較し、(10a)は後置要素が不定表現のため適格であるが、(10b)、(10c)の後置要素は定表現をとっているため不適格としている。(11)の各文でも定表現の代名詞が後置されるとその文は不適格になることが示されている。

(10) a. Into the room dashed a middle-aged tall woman.

b. * Into a dark cave walked John.

c. * On the wall hung canvasses, but not on the easels.

(11) a. * Standing at the entrance to the park was he.

b. * At the foot of the mountain lived they.

c. * Down the hill rolled it.

(高見 1998: 149-150)

以上のことは、英語に限った場合、情報量の少ないと考えられる旧情報、つ

まり主題は一般的には後置されることはないことを意味している。

これに対して、坪本（1998: 180）は、日本語後置文と比較すべきなのは、英語の右方転位文（R-転移文）であるとし、両者には情報の流れにおいて共通点があることを指摘している。坪本によると、右方転位文における転位要素はすでに先行文脈にある既知要素であり、「話題」（topic）であるという。例えば（12b）では定要素、my brother が用いられ適格であるが、（13b）では不定要素 a man が用いられているので不適格である。

(12) a. My brother bought a car.

b. He bought a car, my brother.

(13) a. A man was here to see you last night.

b.?? He was here to see you last night, a man. (坪本 1998: 184)

彼は、日本語「後置文」と英語「右方転位文」には、共通して、「補正」機能があり、「後置要素」は、話のやりとり（interaction）の中で特に、重要な働きをするものであることを指摘している。

また、Young (1980) も (14) のような後置主題文の可能性を示している。

(14) He won the first prize in the speech contest, my younger brother.

この節では、‘he’ と ‘my younger brother’ という二つの主題を持つことになり、聞き手や読み手は後置主題のところまで来て初めて ‘he’ が誰であるのかわかるため、一種のサスペンス効果を有しているという。前節で述べた経験構成的要素に複数の主題を認める考え方や、Rheme-Theme の主題構造の可能性を考慮すると (14) の主題構造は次のようになる。

He	won the first prize in the speech contest,	my younger brother.
Theme 1	Rheme	Theme 2

以上のことから、主題が既知情報を含むものと捉えるならば、英語の主題後置文とは右方転移文を指すと考えてよかろう。

3 日本語の主題と後置文

3.1 日本語の主題

日本語の主題は一般的に「は」によって表示され、三上(1960)は、これを「既知」という概念で捉えている。柴谷(1978: 213-214)は、このような主題になりうるものとして、会話の場にあつて会話の参加者が間違いなく見極められるもの、会話の場に直接的に既に紹介されているものや間接的に既に紹介されているもの、さらに普遍的なもので指示対象が一つしかないものなどを挙げている。久野(1973: 207)も主題となる名詞句は総称(generic)名詞句か、既に話題にのぼっている事物を指す文脈指示(anaphoric)名詞句でなければならぬとしている。

例えば、次の(15)は文法的であるが、(16)は独立文としては非文法的である。

(15) 人間は考える葦である。(総称)

太郎は私の友達である。(文脈指示)

(16) *大勢の人はパーティーに来ました。

*雨は降っています。

久野(1973: 207)

初期の機能文法においては、一つの文には、ただ一個の主題しか現われず、もし一つの文の中に、二つ或いは、それ以上の「は」が現れる場合には、最初の「は」だけが主題を表し、残りは対照を表すと規定している(久野 1973: 30-31)。しかし、この区別は曖昧で、対比の「は」と主題の「は」ははっきり区別できないものが多いし(柴谷 1978: 216)、日本語の文においては、一文に複数の主語が表れる可能性があることも指摘されている(北原 1976: 77-78, 河野 1988: 57)。

「は」による主題構文に関し、野田(1996)はその統語的構造から次のように大きく6種類に分類している。

1. 格成分が主題になっている文

「父はこの本を買ってくれた」構文

2. 格成分の連体修飾部が主題になっている文

「象は鼻が長い」構文

3. 述語名詞の連体修飾部が主題になっている文

「カキ料理は広島が本場だ」構文

4. 被修飾名詞が主題になっている文

「辞書は新しいのがいい」構文

5. 節が主題になっている文

「花が咲くのは7月ごろだ」構文

6. 破格の主題をもつ文

「このにおいはガスが漏れてるよ」構文

特に5の節が主題になる文に関して、野田（1996: 64）は、強調構文とか分裂文（cleft sentence）という特殊な構文とみるのではなく、他の構文と基本的には同じものとして取り扱っている。本稿でもこの考え方に従うものとする。

「は」による主題が及ぼす範囲について三上（1960）は、「は」は単にある文の主題を表すだけのものではなく、文を超えた文脈へもその勢力を及ぼすと指摘し、この機能を「は」のピリオド越えと称した。龍城（2004）はこのような考え方を更に拡大し、機能文法理論の観点から新たな主題分析を試みている。それは日本語の分析の基礎単位に Communicative Unit (CU) という新しい意味ベースのまとまった単位を導入し、従来の日本語テキスト分析における節境界の問題を解消しようとするもので、テーマに関しては、CU内には「スープラテーマ」、「覆面テーマ」、「帰結テーマ」という三つの異なったテーマが存在すると提唱している。「スープラテーマ」とは、CU全体を包含する基礎となるテーマであり、「覆面テーマ」とはスープラテーマの射程内に具現し、スープラテーマと同様のテーマ内容が繰り返されるという現象からテキスト上には具現せず、あたかも覆面を覆ったごときテーマであり、「帰結テーマ」とはスープラテーマを基に、拡張された内容を表すテーマである。

また、「は」の機能に関して、砂川（1990:22-24）は、「は」には結束機能と境界設定機能があり、その下部機能として「主題の維持機能」「主題の導入機能」「主題の再設定機能」が存在することを提案している。これらの機能は後置主

題においてもほぼ継承され、後置主題文の機能を説明する上で重要な指摘である。特に、「主題の導入機能」「主題の再設定機能」は今までの主題機能より積極的なテキスト構成機能として考えられ、主題にはこれまでのように旧情報で情報価値が低いものであるという考え方だけでは説明できない機能があることを示唆している。

3.2 日本語の後置文

久野（1978: 67-68）は、日本語が動詞文末言語であるというのは、書き言葉としての日本語にあてはまることで、話し言葉ではある要素が動詞を超えて右方向へ移動することは頻繁に起こることを述べている。そして後置文は移動規則によって生じたものではなく、文の部分的繰り返しによって生じるものと考ええる。

(17) 君は、本当にだめだね。

(18) 本当にだめだね、君は。

久野の分析によれば、(18)の文は、(17)の様な正常な語順の文から、下線部の要素が文末に移動したものではなく、文の部分的繰り返しによって生じたものと考えた。つまり(18)は次のような省略文が具現したものと捉えたわけである。

(19) (君は) 本当にだめだね、君は (本当にだめだね)。

ここでは、前半の「本当にだめだね」は、省略文として作り出され、その省略文の主語が「君は」であることを更にはっきりさせるため、それを文末で繰り返すことによって、この文が作りだされたとしている。さらに後置文の伝達機能については次のように規定している。

(20) 後置文の伝達機能：後置文において主動詞の後に現れる要素は、

(i) 話し手が最初、聞き手にとって、先行する文脈、或いは非言語的文

脈から復元可能と判断して省略したものを、確認のため文末で繰り返したもののか、

(ii) 補足的インフォメーションを表わすものに限られる

例えば (21) と (22) の Bb が不適格なのは上の規定に反して、「昭和三十年に」と「この本が」という復元不可能な重要な情報が後置されているからであると説明している。

(21) A: 太郎は、昭和何年に生まれた？

Ba: 昭和三十年に生まれた。

Bb: *生まれた、昭和三十年に。

(22) A: 君は、どちらの本が面白かった。

Ba: この本が面白かった。

Bb: *面白かった、この本が。

久野 (1978: 69)

これに対し高見 (1995) は、後置文は、話し手がまず動詞の前で最も伝えたい重要な情報を伝達し、その後で、前半の部分で不足していたと考えられる情報を動詞の後ろで追加的に述べる構文であるとしている。つまり、最も重要な情報をまず言い、そしてその後で不足した情報を述べるものだとしている。

(23) A: 太郎は花子に買ってやったのよ、10カラットのダイヤの指輪を。

B: *太郎は花子に買ってやったのよ。

(24) A: 私言ったの、結婚したいって。

B: *私言ったの。

(23B) (24B) が不適格なのは、(23A) (24A) の後置要素が、先行文脈や発話の状況からは復元できないものであり、さらにこれらの後置要素は、動詞を厳密化下位範疇化 (strictly subcategorize) し、文の必須要素であるにもかかわらず削除されてしまっているからである。

そして高見 (1995: 228) は、このようなより広範囲な後置文を処理するため

に、(25)のような制約を提案した。

- (25) 日本語の後置文に課される機能的制約：日本語の後置文において動詞の後ろに現れる要素は、その文中で最も重要度が高い情報を表す要素以外のものに限られる。

久野や高見の後置文における制約は、節内の個々の要素が動詞の後（文末）に移動する場合の制約で、主題が文末に後置された場合にも当てはまるかどうかは不明である。

次に日本語における後置主題文の機能を分析しながら、以上のような後置文の制約がどの程度後置主題文に有効なものか検討したい。

4 日本語の主題後置文

4.1 主題後置文の機能

4.1.1 題述部再焦点化機能（＝主題補足・確認機能）

題述部は本来前景化しているが、さらに焦点を当てるために前置される。その結果、より情報量の少ない主題部は後置され、補足・確認のため文末に述べられる。

- (26) 君に呈げようと思ってこういうものを持って来ました。帳面です、内
に入ってるのは。 （破戒）

- (27) 当り前じゃないの、そんなことは。 （楡家の人々）

(26)では題述部の「帳面です」が焦点化され前置され、主題部「中に入っているのは」は後置されている。この場合の主題は非言語的文脈により判断できるため省略が可能であるが、あえて確認の意味で述べられている。(27)もやはり題述部が焦点化されて前置され、その結果、主題部は後置されている。このような題述部の再焦点化機能は後置主題文一般について当てはまるもので、主題に関して見てみると先行文脈や非言語的文脈から復元可能なものであり、久

野の倒置規則(20)が当てはまる。また前方照応や外界照応のため主題部に、コソア系の指示語も多用される(このことは後節で取り扱う)。このような後置主題文は、題述部の側からみれば重要な情報を先に述べるという点で焦点化機能と言えるし、主題部の側からみれば補足・確認機能であると言える。

4.1.2 感情表出機能

感情表出機能は、前述の焦点化機能に含まれる機能とも言えるが、特に感情や疑問を表現する際に倒置主題文が使われることが多いことから別に取り上げる。

主要部を早く相手に伝えたいという状況が最もよく起こるのは、五感や感情を表現する場合である。特に会話文においては我々は感情をストレートに相手に伝えようとする傾向にあり、主題の後置が起こりやすい。

(28) 「うまい……うまいですなあ、この鮓は。」 (楡家の人々)

(29) 「とっとうれしいんだよ、ぼくちゃんは。」 (二十歳の原点)

(28)の様な味覚に関する表現は無条件な反応として特に題述部が主題に先行するケースが多い。また(29)のように積極的に題述を前置することで生き生きとした表現を生み出している。驚きを表す表現には疑問詞疑問文がよく使われるが、その場合も疑問詞である題述が先行し、主題が後置されるケースが多い。

(30) 「何ですか、それは」 (太郎物語)

(30)の例のように、最も伝えたい情報(題述)を前置することで、少しでも早く自分の気持ちを相手に伝えたり、感情を強調したりすることが可能である。また次の(31)や(32)のように、相手を非難をする場合にも頻繁に疑問詞を含む題述部が前置される。

(31) 「おい、何だその格好は」 客が大笑いする。 (女社長に乾杯)

(32) 神だの悪魔だのと、なにをいっておるのかきみは。 (ブンとフン)

相手を非難したりからかったりする場合、このような「題述（疑問詞）＋主題」という表現形式がある程度固定化されていると言えるだろう。そして感情、疑問を表す後置主題文においても、主題部にコソア系指示詞や人称詞（特に対象詞）が多用される傾向にあることを指摘しておきたい。

疑問詞を使った感情表現の中には「～とは」「～のは」など、節が主題に組み込まれたものも多い。(33)では感情を表す表現の「なんということでしょう」が、その根拠を表す主題部に先行している。

(33) なんということでしょう。彼女の失踪の原因がさまざまに取り沙汰された中で、わたしが最も軽視した意見こそ、いみじくも「神隠し」と表現した村の老人どものそれであり、そしてそれこそがまさに最も真相に近い考えであったとは。 (エディプスの恋人)

このような表現は主題部に比較的長い表現をとることが多く、「主題＋題述」のままだと座りの悪い文となってしまう、その結果主題部の後置が起こっているものと思われる。このような「～とは」や「～のは」を使った主題文には、(34)や(35)のように感情を表す題述部が明示されないものもある。

(34) あれほど部長と懇意だった安田が、五時間も知らぬ顔をして別な車両に引っこんでいるわけがない。いや、もう一つ突っこめば、安田はどうして石田部長と同じ車両に乗って、長い退屈な旅行を談笑でまぎらわさなかったのであろうか。一步ゆずって、それが遠慮から出たことであっても、五時間もの間、寄りつかなかった理由がしれない。稲村氏は厳正な第三者である。その稲村氏が、小樽をすぎて初めて安田を見たというのは。——（安田辰郎は、小樽駅から《まりも》に乗車したのではあるまいか？） 三原の頭をこれがかすめた。

(点と線)

(35) 「あら、どうしてですか。」

「いろいろ、あってね。老朽で来年はやめてもらう番になっていたところを、岬へいけば、三年ぐらいのびるからね。そういったら、よろこんで、しょうちしましたよ。」

「まあ、老朽！」

三十八や九で老朽とは。まだ乳のみ子をかかえている女が老朽とは。あきれたような顔をしてことばをきった大石先生を、いつのまにか外からかえってきたおかあさんは、... (二十四の瞳)

このような「無題述文」では、先行文脈や主題そのものにある感情が含意されているものと考えられる。例えば(34)では先行文脈全体から「不可解だ」などの感情が含意され、(35)では先行文脈の「まあ、老朽！」という表現や「三十八や九の女性はまだ老朽とは言えない」という一般的常識から「ひどい」などの感情が含意されていると思われる。この形式は、はっきりとした批判表現を避けたい時などに用いられ、特に新聞などの論評などに多く見うけられる。

(36) 「雪印の牛乳」といえば、国民の多くが慣れ親しんできたブランド牛乳。それが、これほどまでに非衛生的な製造過程から生み出されていたとは。消費者の思いを集約すれば、そういうことになるだろう。

(毎日新聞2000年07月06日)

(36)では、先行文脈や主題内容から「有名企業の雪印が非衛生的製造をしたのは大問題だ」という批判が含意されている。このようなはっきりとした批判を避ける表現は後で述べる婉曲機能も兼ね備えていると言える。

4.1.3 共感機能

砂川(1995:375)は、「A(予想可)ノハB(予想不可)ダ」の日本語のハ分裂文の主たる機能は、予測可能な項を前置して先行文脈になるべく近い位置に配列するというところに求められるとしつつも、それは同時に分かりきったこと

を、文頭であえて繰り返すという冗長な手続きをとることにもつながり、情報価値の高い内容、つまりより重要な内容の提示がその分先延ばしにされるといふことにもつながることを指摘している。

会話において、相手の発言に対して同調したり共感したりする場合、上の様な弊害を避けるため、相手に伝えたい内容を早く伝えようとする心理が強く働き、その結果「Bダ、Aノハ」という語順をとると考えられる。

(37) 「……今度は自分が捨てられる番だ……そりゃあもう、眼に見えてる……」

「先ずそういうことに成って行きそうですナ」

「そこですよ、私が心配して遣るのは。旦那もネ、橋本の家で生れた人ですから、何卒して私は……あの家で死なして遣りたくてサ」 喧嘩でもしたか、子供が泣出した。お種は三吉の傍を離れて、子供の方へ行った。 (家)

(37)では、「そこですよ」で相手の発言に対して強く共感し、その後に主題が提示されている。この文の特徴は、「題述部再焦点化機能」とは異なり、後置された主題は省略がしづらい点である。そして後置主題にはなんらかの新たな重要な情報が含まれており、それがその後のテキストの中心的主題としての役割を果たして、そこに新しい談話を積極的に展開して行こうとする機能を見ることができる点である。この機能は、砂川(1990: 22-24)の「主題導入機能」と関係し、すなわち主題を導入することによってそれ以後の談話をその主題のもとにまとめあげる機能も兼ね備えていると言える。また、(38)のように、この用法は相手の発話に対してだけでなく、自分の発言に対して自ら納得し、新たな主題を提示しながらテキストを展開していく場合にも使われる。

(38) まあ、僕に言わせると、あまり君は物をむずかしく考え過ぎているように思われるね。其処だよ、僕が君に忠告したいと思うことは。だって君、そうじゃ無いか。何もそんなに独りで苦んでばかりいなくたっ

ても好かろう。(破戒)

4.1.4 時系列表示機能

会話の中では、題述と先行する文が密接な関係を持ち、出来事の時間的経過、あるいは論理的経過を時間軸に沿って忠実に表現する場合があります、そのような時に後置主題文が用いられる。

(39) 「そういえば大震災のときは箱根で……(略)……それでも強羅の家に四、五人残っていたかしら。そうそう、昼にカツライスの出前を頼んで、その出前持が『お待遠さま』って裏口からはいつてきたとたんなのよ、ぐらぐらってきたのは。みんなとんで逃げたわ。前庭の真ん中に松の木があるでしょう？ あれにみんな掴まったわけよ……
(楡家の人々)

(40) 筆は益々渋るばかりだった。軽い陣痛のようなものは時々起りはしたが、大切な文字は生れ出てくれなかった。こうして私に取って情ないもどかしい時間が三十分も過ぎた頃だったろう、農場の男が又のそりと部屋に這入って来て客来を知らせたのは。私の喜びを君は想像する事が出来る。やはり来てくれたのだ。(小さき者へ)

(39)では「昼にカツライスの出前を頼んで、その出前持が『お待遠さま』って裏口からはいつてきた」後に「ぐらぐらってきた」のである。(40)では「私に取って情ないもどかしい時間が三十分も過ぎた」後に「農場の男が又のそりと部屋に這入って来て客来を知らせた」のである。注意すべきことはここでの後置主題は先行文脈から復元が不可能であり、新たな情報だということである。このように時間軸に沿った描写は、出来事の発生を時系列に理解する上からも有効な操作であり、また次に何が起こるかを聞き手に期待させるサスペンス効果をも生み、結果的に聞き手を話題に引き込む効果があると言える。

4.1.5 精密化機能

精密化機能は先行文脈の内容の一部を精密化するために再度主題として取り上げる用法で、単なる同じ語の繰り返し以上に積極的な機能を有している。つまり題述再焦点化機能での単なる補足、確認のために消極的に省略可能な情報を主題として文末に置いたのとは対照的に、より積極的に正確で詳細な情報を聞き手や読み手に提供しようとする機能である。

- (41) この、急激に高まって来た自分への憎しみは、何に由来するものだろう、——この異様な悲しみは、この取りつく島もない孤独の惨めさは。
(草の花)

(41)は、先行文の題述部「何に由来するものだろう」をそのまま利用することで、2つの主題が効率よく提示され、先行文の主題部を精密化している。精密化の中には、先行文の中の代名詞を含んだ主題を後置主題という形で再度取り上げ、より詳しく述べる場合もある。

- (42) あれは一体何んだっただろうか、何んと名付けたらよいのだろう、笛の音と一緒にツツツと動き出したあの二つの真っ白な足袋は。
(モーツァルト)
- (43) ああ、あれでは駄目よ。あんなにけちけちしてちよっぴり塩をまいて
は。 (楡家の人々)

(42)では、「あれは」が、(43)では「あれでは」により、とりあえず主題を代名詞で提示し、その後で詳細な説明を後置主題形式で述べている。このような表現形式は、代名詞を含む英語の右方移動文と構造的に平行していると言える。

精密化の中には広い内容から狭い内容へ話題を絞り込み、結果的に正確な情報を提供するものもある。これらは先行文との関係で対比的意味合いが生じてくる。

(44) パパは現在のママのことを少しは知っているに違いない、少なくともママがちゃんと結婚して良妻賢母の典型におさまっていることくらいは。 (聖少女)

(45) ほとんどすべてが、ぼくの頭のなかで氷解した。ただし未紀がいつどうして作家と知りあったかというあらたな疑問をのぞいては。
(聖少女)

(44) (45)では、まず漠然とした内容を伝え、次により狭い内容へと主題を絞り込んでいくもので、限定や例外を表現することで文脈に意外性を与えたりする効果がある。

4.1.6 婉曲機能

後置主題文は依頼や勧誘などの発話行為でも使われる。依頼や勧誘の場合、相手に直接内容を伝えることは Brown and Levinson (1987) の言う、Face Threatening Act (FTA) にあたり丁寧さを欠く恐れがある。その場合は、表現をより間接的(婉曲的)なものにして徐々に話題の本質に入ることによって相手へのフェイス侵害度を緩和することができる。例えば、(46)の文のように、聞き手にとって負担となるような内容を述べるまえに、呼び掛け語「姉さん」や、疑問詞「どうです」などを前置し、聞き手に心理的、時間的な余裕を与え FTA を軽減し、結果的により丁寧な表現を可能にしている。(47)も同様である。

(46) 「姉さん、どうです」と三吉は串談のように、「貴方の方で宗さんを引取っては。私の方から毎月の分を進げるとしたら、その方が反って経済じゃ有りませんか」

「真平」とお倉は瘦細った身体を震わせた。「宗さんと一緒に住むのは、死んでも御免だ」 (家)

(47) 丑松は気の毒そうに敬之進の横顔を熟視って、
「どうです風間さん、貴方からも御願いで見ては」 (破戒)

このような語用論的な談話ストラテジーは、その場の状況や相手の表情などを伺いながら話を進めることができるといった利点がある。

1対1の会話において相手の行為や性格について何か述べる場合、日本語では「あなた」などの対称詞を含む主題は一般的には避けられる。しかし、相手の名前を主題化し文末に述べることは会話文ではよく起こる。

(48) 「ところがそれが怪しいんだよ、今シッカリしている積りだが、お前と付き合うとだんだんグラツキ出すかも知れんよ」

「馬鹿ね、譲治さんは。——それじゃ友達になるのはいや？」

(痴人の愛)

(49) 伸子は、毛布を胸の上に引っ張り上げて、笑った。

「変な感じ」

「でも、似合いのカップルだよな」

「そう？」

「そうさ。向こうにも訊いてみようか。僕らがどう見えるか」

伸子はクスクス笑って、

「面白いわね、林君は」

「その『林君』っていうの、他人行儀だなあ、何だか」

「だって他に何て言うの？ 『旦那様』とか『あなた』とか？」

「ウーン……。やっぱ『林君』か」 (女社長に乾杯)

(48)では後置主題の「譲治さんは」は省略可能であるが、相手の名前を言うことで女性が男性にある親愛の情を表現することが可能になる。これを「ばかね」だけだったり、「謙治さんは、ばかね」とすると、相手を非難している意味合いが強まったり、どこかよそよそしい表現になる。

また(49)においても、主題部「林君は」を後置することで、照れや親しみの情を表すことができる。このように対称詞は文末に置かれると、呼び掛け語や沈黙を埋めるための filler に近い働きをし、結果的に全体の表現を和らげる働きをしていると言える。

4.2 題述前置と主題後置

前章で提示した機能は、各々単独で用いられるわけではなく、場合によっては複数の機能が組み合わさっている場合もある。例えば(50)は感情表出機能と精密化機能がいっしょになっているものと考えられる。

(50) これは、いったい、どういうことなのか、と鳥飼重太郎は考えはじめた。どんなに、ゆっくり歩いても七分ぐらいしかかからない所を、十分もかかったというのは。 (点と線)

以上の各機能の特徴をまとめると、一般に主題後置文と言われるものは、厳密には題述が何らかの目的のため前置され、結果的に主題が後置された場合と、主題が何らかの目的で後置されて結果的に題述が前置されたものに分類できる。つまり、前者は題述が積極的に前置され、主題が消極的に後置されたものであり、後者は主題が積極的に後置され、題述が消極的に前置されたものと捉えることができる。この点を各機能ごとに分類すると表(1)のようになる。

表(1) 「題述前置」と「主題後置」の重み付け

	題述前置	主題後置	主題の省略
題述再焦点化機能	○	×	可
感情表出機能	○	○/×	可/不可
共感機能	○	○/×	可/不可
時系列表示機能	○	○/×	可/不可
精密化機能	×	○	不可
婉曲機能	×	○	可/不可

○=積極的 ×=消極的

この内、感情表出機能においては主題に「～のは」や「～とは」などが使われている場合には積極的な主題後置であり、共感機能と時系列表示機能に関しては、後置された主題が新情報を提示しその後の文脈につながる場合は積極的な主題後置であり、それ以外は消極的な主題後置と考えられる。

また、主題の省略に関しては、積極的な主題後置の場合は省略できないが、消

極的主題後置の場合は可能である。婉曲機能に関しては、依頼表現などの場合は省略できないが、呼びかけ語としての主題は省略可能である。

以上のように、いわゆる主題後置文は、それぞれの機能に従って、「題述前置」と「主題後置」のどちらかに重点を置きながら選択される表現方法ということが言える。

4.3 主題後置文の形態

4.3.1 コソア

主題に関して、柴谷（1978：213-214）は、「会話の参加者が間違いなく見極められるものは既知と見做され、題目化され、この場合は普通、「この」・「その」・「あの」といった指示語を伴った題目が起こる」と述べている。前節でも、「コ、ソ、ア」系の指示詞が後置主題文で多く使われているとの指摘はしたが、実際普通主題文と比べて使用頻度に差があるのだろうか。表(2)は、小説における会話文から通常主題文200例と後置主題文200例を無作為に抽出し、それぞれの程度コソア系指示詞が主題部に使われているかを示したものである。

表(2) 主題位置と指示語

度数		指示語（こそあ）		
		あり	なし	合計
主題 位置	普通	41	159	200
	後置	76	124	200
合計		117	283	400

この結果から、主題が後置されている場合の方が普通の主題文に比べコソア系の指示語の使用頻度が高く、 χ^2 検定により、1%水準で有意差が認められた（ $\chi^2=14.799$ $p<.01$ ）。このことは、主題部に前方照応や外界照応を示すコソア系の指示語が使われる場合に、主題と題述の位置が逆転しやすいことを意味する。その理由は、コソア系の指示詞は本来文脈や状況から理解できるものが多

いため、会話において普通の主題位置に現れると冗長な表現になる危険性があるため使用が限られている一方で、主題後置文においては本来の指示の意味合いは薄れ意味が冗長になる危険性は回避されると同時に、主題を後置させることで前節で見たような会話をつなぐさまざまな機能を備えるからではないだろうか。

4.3.2 人称詞

一般に、同じ文の中に人間を指す項と人間以外のものを指す項がある場合には、特別な条件のない限り、人間を指す項を「主題」に置いて表現するというのが、言語的にかなり顕著な傾向である(池上 1981: 43)。また Halliday and Hasan (1976: 48) は、本質的に1, 2人称はテキスト外指示であり、3人称はテキスト内指示であるため、1, 2人称は「話し手」「聞き手」という発話役割 (speech role) を指し、一方で3人称は前方文脈に現れた要素を指示し、テキストの結束性を高める働きがあるとしている。

会話では1対1の場面が多いと予想されるため、主題部に「話し手」「聞き手」を表す1, 2人称詞が多用されるものと予想される。表(3)は前節で無作為に抽出した文例を基に、後置主題文と普通主題文での主題部における人称詞の使用頻度を比較したものである。人称詞には「わたし」「あなた」「かれ」などの人称代名詞の他に、固有名詞や「社長」などの階級語なども含めてある。結果は、後置主題文と普通主題文の間ではっきりとした違いは認められないものの、後置主題文の方が人称詞が多用される傾向にあった。

表(3) 主題位置と人称詞

度数		人称詞		
		あり	なし	合計
主題 位置	普通	60	140	200
	後置	77	123	200
合計		137	263	400

更に、使用されている人称詞を、自称詞、対称詞、他称詞ごとに分けて集計したものが表(4)である。

表(4) 主題位置と人称詞

		人称詞			合計
		自	対	他	
主題位置	普通	18 30.0%	11 18.3%	31 51.7%	60 100.0%
	後置	13 16.9%	30 39.0%	34 44.2%	77 100.0%
合計		31 22.6%	41 29.9%	65 47.4%	137 100.0%

表(4)の結果から、自称詞に関しては普通主題文の方が倒置主題文より使用頻度は高く、逆に対称詞に関しては倒置主題文の方が普通主題文より使用頻度が高いことがわかった。また他称詞に関してはそれほどの違いは見られなかった。 χ^2 検定により、5%水準で有意差が認められた ($\chi^2=7.760$ $p<.05$)。対象詞が後置主題文で多用される理由として、対称詞が聞き手を直接指すことばであるため日本語では基本的な位置では使用が避けられる傾向にある一方で、後置主題の中で使われる場合では、対称詞は本来の指示の意味が薄れ、呼びかけ語や filler としての機能を有し、そのことで表現を和らげたり (婉曲機能)、相手に対する親愛の感情を表したりすることができるからであろう。

一方、後置主題文において自称詞が使われる率が通常の主語文に比べ少ないのは、会話文で自称詞は一般的には表出されないが、表出される場合は文頭や文中に置かれることが普通であり、文末におかれる場合は対比や強調の意味合いがかなり強まるために使用が制限されるからだと考えられる。

5 結論

まず、久野と高見の後置文の制約(20)と(25)の有効性に関してであるが、こ

の二つの制約は基本的に後置主題文にも当てはまると言える。ただ、感情表出、時系列表示、精密化、婉曲などの機能の一部において主題部が積極的に後置されている場合には、そこに新しい情報が提供され、かなり重要な位置を占めている場合があり、題述部の情報に比べ主題部の情報価が低いとは断定できない場合がある。特に、感情表出機能において主題部のみの「無題述文」が存在することは制約(25)ではうまく説明できない。

また我々は倒置主題文の機能には、題述部焦点化機能、感情表出機能、共感機能、時系列表示機能、精密化機能、婉曲機能などがあることを確認した。これらの機能は実際の談話の中で複雑に重なりあい、テキストの文連結度を高めながら生き生きとしたテンポのある表現を可能にし、また効果的に情報を配列することで聞き手を積極的に会話に引き込むことに貢献している。その意味で、後置主題文は決して消極的なものではなく、何らかの動機づけに基づいて積極的に題述前置や主題後置が行われた結果だということが言える。

さらに後置主題文にコソア系の指示語や人称詞の使用頻度が高いことから、後置主題には会話を円滑にすすめるための対人機能が備わっていることも見た。特に対称詞が後置主題文に多用されている事実は、聞き手に対する心理的配慮が強く働いている結果だと言える。

このように、後置主題文は、特に話し言葉を中心とする日常のコミュニケーションにおいて、効率のいい情報伝達的手段として、また円滑な人間関係を構築する手段として大きく寄与していると言える。

参考文献

- 池上 嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 北原 保進 (1976) 「文の構造」大野晋、柴田武編『岩波講座 日本語 6 文法 I』 pp. 34-82
岩波書店
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 久野 暲 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 河野 武 (1992) 「多重主題構造論 (再考)」 『大妻女子大学英文学会』 25 pp. 63-76
大妻女子大学
- 柴谷 方良 (1978) 『日本語の分析』 大修館書店
- 砂川有里子 (1990) 「主題の省略と非省略」『文芸言語研究言語編』 18 pp. 15-34 筑波大学
- 砂川有里子 (1995) 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」 仁田義雄 (編) 『複文の研究』 (下) pp. 353-388 くろしお出版
- 瀬戸 賢一 (1983) 「主題的倒置文」の存在意義について 『大阪経大論集』 155 pp. 101-123 大阪経済大学
- 高見 健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』 くろしお出版
- 高見 健一 (1998) 「情報構造と伝達機能」 神尾昭雄・高見健一 『日英語比較選書 2 談話と情報構造』 研究社出版
- 龍城 正明 (2000) 「テーマ・レーマの解釈とスープラテーマ」小泉保編『言語研究における機能主義—誌上討論会—』 pp. 49-74 くろしお出版
- 龍城 正明 (2004) 「Communicative Unit によるテーマ分析—The Kyoto Grammar の枠組みの中で」『同志社大学英語文法学研究』 76 pp. 1-16 同志社大学
- 坪本 篤朗 (1998) 「主題が後置された文—日英語比較とその問題点—」『人文論集』 49 (1) pp. 175-195 静岡大学
- 野田 尚史 (1996) 『「は」と「が」』 くろしお出版
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. (Second Edition) Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman.
- Brown, G. and G. Yule (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- 三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』 くろしお出版
- Young, D. (1980) *The Structure of English Clause*. Hatchison.

〈用例出典〉

- 『新潮文庫の100冊』 (1995) 新潮社
- 『毎日新聞』 (2000年 7月 6日 朝刊)